

第9回になるアジア地震学会ミーティングが平成24年9月17日から20日の日程でモンゴル国ウランバートルにて開催された。私は日本地震学会から平成24年度アジア地震学会(ASC) 渡航助成をいただき、発表ならびにアジア諸国における地震学研究的動向を学ぶ機会をいただいた。

ASC参加は前々回の筑波、前回のハノイに続いて3回目である。ハノイでは発表のキャンセルが非常に多かった。セッションによっては半分以上がキャンセルということもあり頻繁に予定外の休憩が入った。だが今回のウランバートル大会ではキャンセルは極めて少なかった。ほぼ予定通りにプログラムは進められ会場には多くの聴衆がいて最終日まで緊張感が保たれていた。

実は今回のASCでは開催2週間までプログラムの発表はなく、また会場も二転三転していた。その一方で宿泊ホテルと到着日時の確認や空港への出迎えといった連絡は参加申し込み直後からあった。開催数日前には「初日の午前中は政府宮殿で開会式をするから、きちんとした服装と靴を用意してこい、ジーパンやスポーツシューズは禁止」といった注意喚起のメールも来ていた。参加者の自己責任で運営されるような学会になるのか、それとも、きちんとマネジメントされた学会になるのか見通しが見えないままに関西空港から出国した。ソウル・仁川空港で井出哲さん(東大地球惑星)と同じ飛行機になり、深夜のウランバートル・チンギスハーン国際空港で荷物が出てくるのを待っている間も「本当に外には迎えが待っているのか」「いなかったらタクシー手配できるかな?」という心配を二人でしていた。だが、そういった心配は結果的にすべて無用だった。会議、パーティー、エクスカージョンとも、ほぼ完璧に企画・運営され、周到に準備された「出し物」まで用意されていた。すべてが終わった今から振り返ると、プログラムの2週間前公開もキャンセルを減らすために念入りな確認を行っていたためと思えてくる。

会議初日の朝は宿泊しているホテルフロントまでLOCスタッフが迎えにきた。招待状、パスポート、服装をチェックされ、私は皮靴ではなかったので注意を受けた。大統領宮殿入り口では車を止められ、セキュリティーチェックもあった。開会式会場に入ればしばらくすると、学会発表者ではない制服を着た一団が入ってきた。軍隊ではなさそうだが、警察でもない。ネクタイを見ると「NEMA」とかかれており、あとで調べると国の危機管理庁の人たちであることがわかった。開会式にはモンゴル国副首相のTerbishdagva氏が出席され、冒頭のスピーチをモンゴル語で行った。会場には同時通訳のイヤホンが準備されていて英語でもスピーチの内容がわかるよう配慮されていた。またインド、アメリカ、中国、日本からの招待公演者の英語講演はモンゴル語に翻訳されていた。

モンゴルの英雄・チンギスハーンの巨大銅像の前で集合写真を撮影し、徒歩5分程度のConference hallに会場を移して午後からは学術研究発表となった。発表は2会場で並行し

て進められる形で行われた。2つの会場どちらにも同時通訳のイヤホンが用意されていた。耳にとってみるとすべての講演をモンゴル語に翻訳していた。これは誰のためのものか最初は理解できなかったのだが、講演がはじまると先ほどの制服集団「NEMA」のスタッフがかなりたくさん会議に参加していることがわかった。2日目、3日目は制服を着ている人は少数であったが、かなりの数のモンゴル人（確認できていないがNEMAのスタッフが多かったと思われる）が参加していてイヤホンを耳にかけて講演を聞いていた。

ウランバートルへの極端な一極集中が進むモンゴルでは、地震への備えは国家的重要課題と認識されはじめている。そういう意識を危機管理庁の職員に広く共有させるための機会として、このASCミーティングが位置づけられているという側面があったのだろう。防災はある程度カネのある国しか取り組めない政策であり、アジア諸国では、まだ防災に真剣に取り組める経済状態にない国も少なくない。そんな中であって、危機管理担当公務員のアジア地震学会への出席を促し、そのために同時通訳を準備するという今回の試みは学術団体の防災貢献のひとつの形として評価できると感じた。実際、ウランバートル周辺のリスクアセスメントに関する発表では、地球科学的な内容に終始したものであっても、かなり熱心に発表を聞いている様子が伝わってきた。

発表プログラムでは初日の最初に「Role of CTBT in promoting civil and scientific application of verification technology」が配置されていたことが目をひいた。学会のプログラム配置は、その学会において何が重要視されているかをはかる重要な情報である。日本地震学会でも初日午前中のA会場が最重要課題であり、最終日のD会場で発表されるような内容はほとんど誰からも注目されない現実がある。

核実験探知を実施する国連関連機関としてCTBTOがあり、そこで地震学の知見が使われていることは知っていたが、ASCの最初のセッションを占める「アジアの地震学における最重要課題」という認識はなかった。会場で久しぶりにお会いした青地秀雄さん（フランス地質調査所）によれば、ヨーロッパにおける地震学では核実験探知は重要テーマのひとつであり、それを仕事にしつつ関連業務という形で地震学研究に従事する研究者は少なくないとのことである。

日本では被害地震の危機が身近に感じられているので内需志向の地震学ポストがかなりある。またHi-netをはじめとした世界最高レベルの観測網も既に構築されている。それゆえ日本の地震学の社会貢献は国際的なトレンドとは異なった方向へと進化しているのかもしれない。これをもって地震学におけるガラパゴス化という人もいる。

日本ではこの先も被害地震が起こることはほぼ確実なので内需的な需要は不滅であろう。だがローカルな観測研究ばかりでは国際的な存在感を高めることは難しい。核実験探知といった国際的な実用地震学分野でも活躍できる図太くて情報発信力のある国内集団がぜひとも必要だと思った。そこに半リタイア世代から大学院生まで幅広い世代の地震学者が参集し、グローバルな課題とローカルだが緻密な日本の研究成果や地震観測網を結びつけられれば、日本の地震学の存在感を高めるひとつの柱になりうるように感じた。

私自身は「Outreach, society and cooperation」のセッションでインドネシア人研究者らと共同で作成した津波防災教材の話をした。同セッションでは4つの発表があり、うち2つはモンゴルからの発表であった。モンゴルにおける地震防災への実践的取組の一端を知ることができ大変勉強になった。うち1つは日本から輸入された「コミュニティーベースの防災」という話であったが、市民レベルで地震防災を普及させることに苦勞している様子がかがえた。

夜は初日から3日目まで毎晩ともイベントが用意されていた。各国の伝統芸能を楽しむことがASCの魅力の一つである。初日のWelcome receptionではモンゴルの伝統的楽器であるモリンホール（馬頭琴）の生演奏やホーミーの実演を楽しんだ。こちらも楽しい催しであったが、3日目の夜に行われたClosing ceremonyは印象深い出し物がもりだくさんで圧倒された。女性2人による体の柔らかさ、強靭さを駆使したモンゴル伝統のオランノゴラルトゥ（アクロバット演技）は驚異的であった。研究者自身が演奏者になったモンゴル伝統音楽の生演奏も披露された。LOCスタッフの中心として会の運営を取り仕切っていたAdiyaさんがヤトガ（モンゴル箏）の奏者としても登場した。全体司会を務めるDemberelさん（LOCのSecretaryでもある）はギターを抱えて舞台にあがり、揃いの衣装を着たバックコーラス（研究所スタッフら）を従えて何曲もの歌を熱唱した。これは大いに盛り上がり、その後、インドとベトナムの研究者がそれぞれの国の歌をアカペラで披露した。続いて照明が暗くなりダンスタイムとなった。多くの研究者が参加してダンスが続いた。加藤照之さん（東大地震研）と高木瑠美さん（神戸大学）は輪の中心で踊りアジア諸国の研究者との交流を深めていた。

最後になるが、本大会まで4年間ASC会長を務めていた平原和朗さん（京大地球惑星）は開会式から最後のパーティーまで挨拶・スピーチの連続で大活躍であった。モンゴル在住のLOCスタッフとも密な連絡をとって会の安定した運営にアドバイスを出すとともに、日本国内でもASCへの参加勧誘をしていたと聞いている。

地震学において「国際的」という言葉は、ほとんどの場合、AGUで優れた発表をして、Nature、Science、JGRに一流の論文を書くことと捉えられている。こういったサイエンスの主流での活躍はもちろん重要であるが、地球科学的に重要なフィールドであり巨大地震災害が発生するアジア、中南米、アフリカ諸国での地震学振興も「もう一つの国際化」として不可欠である。平原さんはこの両立ができる数少ない日本人研究者で、石川有三さん（産総研）らの協力をえながらアジアの地震学界における日本の存在感を高めるための活動に力を入れてきたことが今回の学会参加でよくわかった。4年間のアジア地震学会・会長お疲れ様でした。



写真1 大統領宮殿における開会セレモニーの様子



写真2 A会場における発表の様子（発表者は加藤照之さん）



写真3 モンゴル語への同時通訳が行われていた講演会場



写真4 Adiyaさん（右端）らによるモンゴル伝統楽器による演奏



写真5 Demberel さん（中央）熱唱中



写真6 フィールドトリップは9台の車を連ねて移動